

# 中世語、近世語における文補語標識 「こと」の使用について

渡 邊 ゆかり

## 1. は じ め に

渡邊 (2004a) (2004b) では、中古の日記、随筆、物語において文補語標識「こと」がどのような場合に出現するのかについての調査ならびに分析を行った。その結果、中古語の文補語標識「こと」には、現代語には存在しない「文補語の表すコトガラの未然性を示す」働きと、「文補語が表すコトガラの主体にとっての重大性を強調する」働きが存在することが明らかとなった。

本稿においては、中古以前には存在していたと考えられる、上記の有標的な2つの「こと」の働きが消失し、代わって新たな働きが派生する過程を明らかにするために、中世語、近世語における文補語標識「こと」の使用について考察を行う。

以下、まず2では、渡邊 (2004a) (2004b) における中古語における文補語標識「こと」についての考察結果を概観し、次に3、4では、中世語、近世語における文補語標識「こと」の使用傾向について分析する。

## 2. 中古語における文補語標識「こと」の使用傾向

渡邊 (2004a) (2004b) では、中古の日記、随筆、物語において文補語標識「こと」がどのような場合に出現するのかについて、調査ならびに分析を行った。調査に用いた作品は次の①-⑥である。

- ①「枕草子」『日本古典文学大系』19巻 岩波書店
- ②「紫式部日記」『日本古典文学大系』19巻 岩波書店
- ③「土左日記」『日本古典文学大系』20巻 岩波書店
- ④「和泉式部日記」『日本古典文学大系』20巻 岩波書店
- ⑤「更級日記」『日本古典文学大系』20巻 岩波書店
- ⑥「源氏物語」『日本古典文学大系』14巻-18巻 岩波書店

まず、渡邊（2004a）では、上記のうちの①－⑤の作品を対象に、主格文補語と対格文補語を取る動詞述語文において、如何なる述語がコト止め文補語を取る傾向にあるのかを分析し、以下のことを明らかにした。

- ・文補語が表す事象の存在性に関する情報を表す述語<sup>1)</sup>は、コト止め文補語をとる傾向にある。
- ・発話行為述語は、文補語が伝達内容を表している場合にのみ、コト止め文補語をとる。
- ・心情述語は、文補語が主格か対格かにかかわらず、文補語が述語の表す心情発生時において将来における実現が予想される事象を表す場合には、コト止め文補語をとる傾向にある。また、文補語が述語の表す心情発生時よりも距離をおいた過去に実現した事象を表す場合や、時間的な幅のある反復的事象を表す場合にもコト止め文補語をとることがある。
- ・知覚述語の「きく類」の述語は、述語が文補語の表す伝達内容を、聴覚器官を通して受容するという行為を表す場合にはコト止め文補語をとることがある。

（渡邊2004a：p. 700）<sup>2)</sup>

次に、渡邊（2004b）では、⑥の作品について、心情述語の「おもふ類」「おぼゆ類」、知覚動詞の「きく類」、認識述語の「しる」が、どのような場合にコト止め文補語を取る傾向にあるのかについて調査、分析を行った<sup>3)</sup>。その結果、中古語の文補語標識「こと」には、現代語には存在しない「文補語の表すコトガラの未然性を示す」働きと、「文補語が表すコトガラの主体に

---

1) 例えば、「あり」「なし」といった存在（存在，不存在）述語、「かぎりなし」「いみじ」「しげし」「たびたびなり」「かたし」といった存在様相（程度，頻度，困難，不可能）述語、「たゆ」「つく」「はつ」「やむ」のような非存在化述語がこれに相当する。

2) 渡邊（2004a）の「きく類」は、「聞く」「きく」「聞ゆ」「きこゆ」を語基とする述語動詞の総称である。

3) 渡邊（2004b）における「おもふ類」は、「思ふ」「おもふ」「思す」「おぼす」を語基とする述語動詞の総称である。また「おぼゆ類」は、「思ゆ」「おぼゆ」を語基とする述語動詞の総称である。さらに、「きく類」は、「聞く」「聞ゆ」を語基とする述語動詞の総称である。

としての重大性を強調する」働きが存在することが明らかとなった<sup>4)</sup>。

以下、3、4では、中世語、近世語においてこれらの働きがどのように変化していったのかについて、考察を行っていく。

### 3. 中世語、近世語における文補語標識「こと」 の使用についての調査方法

中世語、近世語における文補語標識「こと」の使用についての調査に際して、使用したテキストは、文部科学省共同利用機関国文学研究資料館がウェブ上で公開している、日本古典文学作品データベースにおいて、以下のジャンルで検索しヒットした作品である。

〈検索ジャンル〉

中世〈小説・評論〉〈随筆、随想・説教〉〈劇文学〉〈物語〉〈国学・評論〉

近世〈小説・評論〉〈随筆、随想・説教〉〈劇文学〉〈物語〉〈国学・評論〉

なお、この調査は、2005年1月－2005年12月の間に行われた。従って、今回の調査でヒットした作品群は、日本古典文学作品データベースに断本が加わった2006年3月31日以降にヒットする作品群とは一致しない。

中世においては277作品、近世においては、132作品ヒットしたが、後者については、『日本古典文学大系』の编者による漢文書き下し文の6作品を除外した126作品を調査対象とした<sup>5)</sup>。

以下に示す巻は、検索対象となった作品が収められていた巻であるが、紙幅の都合上作品名は省略する。

中世：『日本古典文学大系』27巻、30巻－38巻、40－43巻、65巻、81巻、  
82巻、84巻－88巻 岩波書店

近世：『日本古典文学大系』47巻－56巻、59巻－64巻、90巻、91巻、94

4) 渡邊(2004b)で指摘したように、これらの働きは、修飾要素を伴わない次の(i)

(ii) のような独立性の高い「こと」の意義と派生関係にあると考えられる。

(i) 吾<sup>わが</sup>背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup>波<sup>は</sup> 物<sup>もの</sup>莫<sup>な</sup>念<sup>おもひ</sup> 事<sup>こと</sup>之<sup>し</sup>有<sup>あら</sup>者<sup>ば</sup> (萬葉集 506)

(ii) 許<sup>こと</sup>登<sup>は</sup>波<sup>き</sup>佐<sup>だ</sup>太<sup>め</sup>米<sup>つ</sup>都<sup>い</sup> 伊<sup>い</sup>麻<sup>ま</sup>波<sup>は</sup>伊<sup>い</sup>可<sup>か</sup>尔<sup>に</sup>世<sup>せ</sup>母<sup>も</sup> (萬葉集 3418)

5) 除外した作品は、「山中人饒舌」「童子問」「統道真傳」「自然真榮道」「近世俳文集」「徂來先生答問書」の6作品である。

これらの作品につき、以下のような共出検索を行い、ヒットした用例から、対格文補語（「ということを」のように「という」を挟むもの、疑問文のものを除く）を取る、「知る」「聞く」「やめる」「忘れる」を語基とする動詞述語文の例を抽出し、これらについてどのような場合に文補語標識「こと」を取るのかについて分析を行った。なお、作品中の和歌の部分、前書き、後書き、序の部分、漢文書き下し文の用例は、分析対象から除外した<sup>6)</sup>。

〈共出検索（10字以内）項目〉

「を」「聞」/「ヲ」「聞」/「も」「聞」/「モ」「聞」

「を」「知」/「ヲ」「知」/「も」「知」/「モ」「知」

「を」「忘」/「ヲ」「忘」/「も」「忘」/「モ」「忘」

「を」「やめ」/「ヲ」「ヤメ」/「も」「やめ」/「モ」「ヤメ」

以下、4では、上記のような方法で行った調査の結果を示すと同時にその分析を行う。

## 4. 調 査 結 果

### 4.1. 「聞く」を語基とする動詞述語文の場合

ここでは、文補語を取る動詞が「聞く」を語基とするものの場合について見ていく。

まず、中世語の「聞く」については、以下の表1に示すように、「文補語が表すコトガラによって発生する音を知覚する行為」を表す「聞く1」と、「文補語が表す情報を所有する行為」を表す「聞く2」が存在した。

---

6) 和歌を考察対象から除いたのは、音節数の制限が文補語標識の選択に影響している可能性があるという理由による。また、前書き、後書き、序の部分を除外したのは、この部分が作品の著者とは異なる後世の人物による場合があることによる。

表1 中世語の「聞く」が取るコト止め、連体止め文補語数

中世語の「聞く」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	合 計
聞く 1	文補語が表すコトガラによって発生する音を知覚する行為	0	56	56( 71%)
聞く 2	文補語が表す情報を所有する行為	9	14	23( 29%)
合 計		9	70	79(100%)

次の (1) は中世語の「聞く 1」の連体止めの例に、(2) と (3) は各々中世語の「聞く 2」のコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (1) 豆の殻を焚きて豆を煮ける音のつぶへと鳴るを聞(き)給(ひ)ければ、(「徒然草」第69段『日本古典文學大系』30巻 p. 146)
- (2) ちんやさいかい八千世の年をふることも、ちくさの八千年をふることも、聞に、(「唐糸さうし」『日本古典文學大系』38巻 p. 140)
- (3) をば北の方さへ失せたるを聞きて、(「増鏡」第16『日本古典文學大系』87巻 p. 467)

次に、近世語の「聞く」についても、以下の表2に示すように「文補語が表すコトガラによって発生する音を知覚する行為」を表す「聞く 1」と、「文補語が表す情報を所有する行為」を表す「聞く 2」が存在した。

表2 近世語の「聞く」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数<sup>7)</sup>

近世語の「聞く」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
聞く 1	文補語が表すコトガラによって発生する音を知覚する行為	0	157	0	157( 89%)
聞く 2	文補語が表す情報を所有する行為	12	7	0	19( 11%)
合 計		12	164	0	176(100%)

7) 黒田(1976)における第2の関係節に相当する次の (i) (ii) のような文補語も存在したが、これらについては除外した。

- (i) いたうねびたれど正しく妻の聲なるを聞(き)て、(「雨月物語」『日本古典文學大系』56巻 p. 64)
- (ii) 烏鳴の悪きを聞いては、(「好色萬金丹」巻之2『日本古典文學大系』91巻 p. 84)

次の(4)は近世語の「聞く1」の連体止めの例に、(5)と(6)は各々近世語の「聞く2」のコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (4) 「さもあらば京の水であらはいで」とのゝしるを聞て、(「好色一代男」巻1『日本古典文学大系』47巻 p. 43)
- (5) 此川の歩渡りなることを聞けるにや、(「東海道中膝栗毛」三編下『日本古典文学大系』62巻 p. 157)
- (6) 家に久しき男に黄金一枚かくし持(ち)たるものあるを聞(き)つけて、(「雨月物語」『日本古典文学大系』56巻 p. 131)

表1、表2からは、中世語、近世語ともに「聞く」が「文補語が表すコトガラによって発生する音を知覚する行為」すなわち「聞く1」の行為を表している場合には、文補語は必ず連体止めであることがわかる。同様のことは、中古語、現代語にもあてはまる<sup>8)</sup>。

一方、「文補語が表す情報を所有する行為」すなわち「聞く2」については、コト止め文補語を取る場合と連体止め文補語を取る場合が存在している。この点については、「聞く2」がコト止め文補語を取る傾向にある現代語とは異なっている<sup>9)</sup>。ただし、渡邊(2004a)(2004b)の中古語の調査では、中世語、近世語と同様、「聞く2」がコト止め文補語を取る例と連体止め文補語を取る例が存在した。次の(7)は前者の、(8)は後者の例に相当する。

- (7) まことにかう讀ませ給ひなどすること、はたかのものいひの内侍は、え聞かざるべし、(「紫式部日記」『日本古典文学大系』19巻 p. 501)
- (8) そのころ、高麗人のまゐれるが中に、かしこき相人ありけるを聞き召して、(「源氏物語・桐壺」『日本古典文学大系』14巻 p. 43)

次に、中世語、近世語の「聞く2」について、文補語が「ア・普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表している場合と「イ・述語動詞の表す

8) 中古語については、渡邊(2004a)を参照のこと。現代語については、久野(1973)、工藤(1985)、橋本(1990)などを参照のこと。

9) 工藤(1985: p. 46)では、「こと」を取る動詞として「言う、話す、聞く、書く、知らせる、伝える」のような伝達活動に関する動詞が挙げられている。

動作時現在において未然のコトガラ」を表している場合と「ウ、述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラ」を表している場合のそれぞれにおいて、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語（ノ止め文補語は近世語のみ）がどの程度の割合で出現しているのかについて見ていく<sup>10)</sup>。

次の表3、表4は、中世語、近世語の「聞く2」がア、イ、ウのタイプの文補語を取る場合の、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語の出現数ならびに出現率を示している。

表3 中世語の「聞く2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

中世語の「聞く2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	3(100%)	0( 0%)	3(100%)
イ、「聞く2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	0	0	0
ウ、「聞く2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	6( 30%)	14(70%)	20(100%)
合 計	9( 39%)	14(61%)	23(100%)

表4 近世語の「聞く2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近世語の「聞く2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	1(100%)	0( 0%)	0(0%)	1(100%)
イ、「聞く2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	0	0	0	0
ウ、「聞く2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	11( 61%)	7(39%)	0(0%)	18(100%)
合 計	12( 63%)	7(37%)	0(0%)	19(100%)

まず、文補語が「ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すものについては、中世語においてコト止め3例のみが存在した。先に挙げた(2)がこの例に相当する。一方、近世語においてもコト止め1例のみが存在した。先に挙げた(5)がこの例に相当する。このタイプにおいては、表3、表4より中世語と近世語のコト止め文補語の出現率に有意な差は存在しない。

次に、文補語が「イ、『聞く2』が表す動作時現在において未然のコトガ

10) ノ止め文補語が登場するのは、近世語からである。(cf. 吉川1950)

ラ」を表すものについては、中世語、近世語ともに用例が存在しなかった。従って、このタイプについては、中世語と近世語のコト止め文補語の出現率に有意な差が存在するか否かを検定することは不可能であった。

最後に、文補語が「ウ。『聞く 2』」が表す動作時現在において已然のコトガラ」を表すものについては、中世語において、コト止め 6 例、連体止め 14 例、計 20 例が存在した。次の (9) と (10) は、各々中世語に存在したこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (9) 法顯三藏の、天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給 (ひ) ける事を聞 (き) て、(「徒然草」第 84 段『日本古典文學大系』30 巻 p. 157)
- (10) 近江の石山寺にこもりけるを、平家聞きつけ、(「義經記」巻第 1『日本古典文學大系』37 巻 p. 36)

一方、近世語においては、コト止め 11 例、連体止め 7 例、計 18 例が存在した。次の (11) と (12) は、各々近世語に存在したこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (11) われを愴のあまり、鶴を放たる事を聞しりて知らず顔し、(「椿説弓張月」前篇巻之 2『日本古典文學大系』60 巻 p. 119)
- (12) ことに佳婿の麗なるをほの聞 (き) て、(「雨月物語」『日本古典文學大系』56 巻 p. 88)

このタイプについては、近世語のコト止めの出現率が中世語に比べて 31 ポイント高かったため、この差が有意であるか否かについて表 5 の  $2 \times 2$  の分割表を用いた  $\chi^2$  検定を行ってみたところ、 $P > .05$  で有意性は棄却された。

表 5 中世語、近世語の「聞く 2」が取るウのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	6 ( 30%)	11 ( 61%)	17
コト止め以外の文補語	14 ( 70%)	7 ( 39%)	21
合 計	20 (100%)	18 (100%)	38



$$\chi^2_0 = \frac{38(6 \times 7 - 11 \times 14)^2}{20 \times 18 \times 17 \times 21} = 3.70 < \chi^2_{0.05}(3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

以上、4.1では、「聞く」が取る文補語についての調査結果を見てきた。次の4.2では「知る」が取る文補語についての調査結果を見ていく。

#### 4.2. 「知る」を語基とする動詞述語文の場合

ここでは、文補語を取る動詞が「知る」を語基とするものの場合について見ていく。

まず、中世語の「知る」については、以下の表6に示すように、「文補語が表すコトガラの経験的意味を獲得する行為」を表す「知る1」と、「文補語が表す情報を所有する行為」を表す「知る2」が存在した。

表6 中世語の「知る」が取るコト止め、連体止め文補語数

中世語の「知る」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	合 計
知る1	文補語が表すコトガラの経験的意味を獲得する行為	6	0	6( 7%)
知る2	文補語が表す情報を所有する行為	30	48	78( 93%)
合 計		36	48	84(100%)

次の(13)は中世語の「知る1」のコト止めの例に、(14)と(15)は各々中世語の「知る2」のコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (13) 欲心ハ其極ル事ヲ不レ知。(『沙石集』巻第10本(8)『日本古典文学大系』85巻 p. 421)
- (14) 去年盛りあらば、今年は花なかるべき事を知るべし。(『風姿花傳』『日本古典文学大系』65巻 p. 395)
- (15) また、母の命盡きたるを不知ずして、いとけなき子の、なほ乳を吸ひつゝ、(『方丈記』『日本古典文学大系』30巻 p. 31)

次に、近世語の「知る」についても、以下の表7に示すように「文補語が

表すコトガラを経験的意味を獲得する行為」を表す「知る 1」と、「文補語が表す情報を所有する行為」を表す「知る 2」が存在した。

表 7 近世語の「知る」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

近世語の「知る」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
知る 1	文補語が表すコトガラを経験的意味を獲得する行為	37	0	0	37 ( 26%)
知る 2	文補語が表す情報を所有する行為	66	38	3	107 ( 74%)
合 計		103	38	3	144 (100%)

次の (16) は「知る 1」のコト止めの例に、(17) と (18) と (19) は各々「知る 2」のコト止めの例と連体止めの例とノ止めの例に相当する。

- (16) 常に足ことを知るべし。(「浮世物語」『日本古典文学大系』90巻 p. 327)
- (17) 蚤といふ物は愚な物じゃ。忽命を取るゝ事を知らいで。(「夏祭浪花鑑」『日本古典文学大系』51巻 p. 269)
- (18) 今殺さ(れ)るも知らずして、にこ―笑ふ愛らしさ。(「小袖曾我薊色縫」『日本古典文学大系』54巻 p. 471)
- (19) それでもわちきがいろ―苦勞したのも知らずに、(「春色梅兒譽美」初編巻之 3『日本古典文学大系』64巻 p. 87)

表 6、表 7 からは、中世語、近世語ともに「知る」が「文補語が表すコトガラを経験的意味を獲得する行為」すなわち「知る 1」の行為を表している場合には、文補語は必ずコト止めであることがわかる。同様のことは、現代語にも当てはまる<sup>11)</sup>。なお、渡邊 (2004a) (2004b) の中古語の調査では「知る 1」は存在しなかった。一方、「文補語が表す情報を所有する行為」すなわち「知る 2」については、コト止めの例と連体止めの例が存在している。同様のことは、中古語、現代語にも当てはまる<sup>12)</sup>。

次に、中世語、近世語の「知る 2」について、文補語が「ア・普遍的・慣

11) 渡辺 (1997) を参照のこと。

12) 中古語については、渡邊 (2004a) を参照のこと。現代語については、久野 (1973)、工藤 (1985)、橋本 (1990) などを参照のこと。

例的・教義的・教訓的コトガラ」を表している場合と「イ、述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ」を表している場合と「ウ、述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラ」を表している場合のそれぞれにおいて、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語（ノ止め文補語は近世語のみ）がどの程度の割合で出現しているのかについて見ていく。

次の表8、表9は、中世語、近世語の「知る2」がア、イ、ウのタイプの文補語を取る場合の、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語の出現数ならびに出現率を示している。

表8 中世語の「知る2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

中世語の「知る2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	16( 70%)	7(30%)	23(100%)
イ、「知る2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	6(100%)	0( 0%)	6(100%)
ウ、「知る2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	8( 16%)	41(84%)	49(100%)
合 計	30( 38%)	48(62%)	78(100%)

表9 近世語の「知る2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近世語の「知る2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	43(98%)	1( 2%)	0(0%)	44(100%)
イ、「知る2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	5(45%)	6(55%)	0(0%)	11(100%)
ウ、「知る2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	18(35%)	31(60%)	3(6%)	52(100%)
合 計	66(62%)	38(36%)	3(3%)	107(100%)

まず、文補語が「ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すものについては、中世語において、コト止め16例、連体止め7例、計23例が存在した。次の(20)と(21)は、各々中世語に存在したこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

(20) 何事ニモ徳失ナラフ事ヲ知ラズシテ、(「沙石集」巻第7 (25)『日

本古典文學大系』85巻 p. 328)

- (21) 用は體にあり、別にはなきものと心得て、似すべき理のなきを知る事、(『至花道』『日本古典文學大系』65巻 p. 407)

一方、近世語においては、コト止め43例、連体止め1例、計44例が存在した。先に挙げた(14)と次の(22)は、各々近世語に存在したこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (22) されば趣向の穿鑿をやめて、たゞ誠實のおもひを詠出るにしく事なきを知るべし。(『歌學提要』『日本古典文學大系』94巻 p.151)

このタイプについては、近世語のコト止めの出現率が中世語に比べて28ポイント高かったのでこの差が有意であるか否かについて次の表10の2×2分割表を用い、イエーツの修正式を用いた $\chi^2$ 検定を行ってみたところ、 $P < .005$ で有意性が認められた<sup>13)</sup>。

表10 中世語、近世語の「知る2」が取るアのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	16( 70%)	43( 98%)	59
コト止め以外の文補語	7( 30%)	1( 2%)	8
合 計	23(100%)	44(100%)	67

$$\chi_0^2 = \frac{67 \left( \left| 16 \times 1 - 43 \times 7 \right| - 67 \div 2 \right)^2}{23 \times 44 \times 59 \times 8} = 14.22 > \chi_{0.005}^2(7.88)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .005$$

従って、今回の調査からは、「知る2」が取るこのタイプの文補語については、コト止め文補語の出現率が中世語から近世語にかけて上昇していると見ることができる。また、この結果は、中世語から近世語にかけて「こと」の

13) この検定においては、近世のコト止め以外の文補語の数値が5以下であったため、イエーツの修正式を用いた。

働きの中に新たに「非特定の抽象的なコトガラを示す」働きが発生したことを示唆している。

次に、文補語が「イ.『知る2』が表す動作時現在において未然のコトガラ」を表すものについては、中世語においては、コト止め6例のみが存在した。次の(23)は中世語に存在したこのタイプのコト止めの例に相当する。

- (23) 人間忿々トシテ、冥途ノ近ヅク事ヲモ不<sub>レ</sub>知、(「沙石集」巻第5末  
(11)『日本古典文学大系』85巻 p. 259)

一方、近世語においては、コト止め5例、連体止め6例、計11例が存在した。先に挙げた(17)と(18)は、各々近世語に存在したこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

このタイプについては、近世語のコト止めの出現率が中世語に比べて55ポイント低かったのでこの差が有意な差であるか否かについて、次のような直接確率法による検定を行ったところ、 $H_0$ は棄却され、 $P < .05$ で有意性が認められた<sup>14)</sup>。

表11 中世語、近世語の「知る2」が取るイのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	6(100%)	5( 45%)	11
コト止め以外の文補語	0( 0%)	6( 44%)	6
合 計	6(100%)	11(100%)	17

$H_0$ ：中世語と近世語のコト止めの出現率には有意な差はない

表12  $H_0$ を棄却すべきパターン

$P_0$	
6	0
5	6

14) この検定においては、中世のコト止め以外の文補語の数値が0であったので直接確率法による検定を用いた。

$$P_0 = \frac{11!6!6!11!}{17!6!0!5!6!} = 0.03$$

$$\therefore P < .05$$

従って、今回の調査からは、「知る2」が取るこのタイプの文補語については、コト止め文補語の出現率が中世語から近世語にかけて低下しているといえることができる。また、この結果は、中古語に存在していた「文補語が表すコトガラが述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラであることを示す」という「こと」の働きが中世語から近世語にかけて弱まっていったことを示唆している。

最後に、文補語が「ウ、『知る2』が表す動作時現在において已然のコトガラ」を表すものについては、中世語においては、コト止め8例、連体止め41例、計49例が存在した。次の(24)と先に挙げた(15)は、各々中世語に存在したこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (24) サテコソ四郎左近太夫入道ノ落給ヌル事ヲバ不レ知シテ、自害シ給ヌト思ケレ。(『太平記』巻第10『日本古典文学大系』34巻 p. 353)

一方、近世語においては、コト止め18例、連体止め31例、ノ止め3例、計52例が存在した。次の(25)と(26)と先に挙げた(19)は、各々近世語に存在したこのタイプのコト止めの例と連体止めの例とノ止めの例に相当する。

- (25) 況や此女の里長に請ふて屍を得てのちに其夫なる事を知り、(「折たく柴の記」『日本古典文学大系』95巻 p. 341)
- (26) 例の此格子の外には、人の見るをも知らで、(「仁勢物語」下『日本古典文学大系』90巻 p. 200)

このタイプについては、近世語のコト止め文補語の出現率が中世語よりも19ポイント高かったので、この差が有意な差であるか否かについて次の表13の2×2分割表を用いて $\chi^2$ 検定を行ってみたところ、 $P < .05$ で有意性が認められた。

表13 中世語、近世語の「知る2」が取るウのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時 代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	8 ( 16%)	18 ( 35%)	26 ( 26%)
コト止め以外の文補語	41 ( 84%)	34 ( 65%)	75 ( 74%)
合 計	49(100%)	52(100%)	101(100%)

$$\chi^2_0 = \frac{101(8 \times 34 - 18 \times 41)^2}{49 \times 52 \times 26 \times 75} = 4.41 > \chi^2_{0.05}(3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .05$$

従って、今回の調査からは、「知る2」が取るこのタイプの文補語については、コト止め文補語の出現率が中世語から近世語にかけて上昇していると見ることができる。また、この結果は、中世語から近世語にかけて「こと」が新たな働きを獲得していったことを示唆している。この働きについては、4.5.3で後述する。

以上、4.2では「知る」が取る文補語についての調査結果を見てきた。次の4.3では「忘れる」が取る文補語についての調査結果を見ていく。

#### 4.3. 「忘れる」を語基とする動詞述語文の場合

ここでは、文補語を取る動詞が「忘れる」を語基とするものの場合について見ていく。

まず、中世語の「忘れる」については、以下の表14に示すように文補語が表すコトガラを失念する行為を表す「忘れる2」が存在した。

表14 中世語の「忘れる」が取るコト止め、連体止め文補語数

中世語の「忘れる」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	合 計
忘れる1	文補語が表すコトガラの経験的意味を失念する行為	0	0	0( 0%)
忘れる2	文補語が表すコトガラを失念する行為	12	8	20(100%)
合 計		12	8	20(100%)

次の(27)と(28)は、各々中世語の「忘れる2」が取るコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (27) 那蘭陀寺にて、道眼聖談義せしに、八災と云(ふ)事を忘れて、  
(「徒然草」第238段『日本古典文學大系』30巻 p. 283)
- (28) 無常迅速ナルヲ忘レテ、(「正法眼藏隨聞記」2『日本古典文學大系』81巻 p. 346)

次に、近世語の「忘れる」については、以下の表15に示されるように、文補語が表す経験的意味を失念する行為を表す「忘れる1」と文補語が表すコトガラを失念する行為を表す「忘れる2」が存在した。

表15 近世語の「忘れる」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

近世語の「忘れる」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合計
忘れる1	文補語が表す経験的意味を失念する行為	2	0	0	2 ( 7%)
忘れる2	文補語が表すコトガラを失念する行為	9	8	9	26 ( 93%)
合 計		11	8	9	28(100%)

次の(29)は、近世語における「忘れる1」のコト止めの例に相当する。

- (29) 筆取事も忘れつらん (「菅原傳授手習鑑」『日本古典文學大系』99巻 p. 52)

また、次の(30)と(31)と(32)は、各々近世語における「忘れる2」のコト止めの例と連体止めの例とノ止めの例に相当する。

- (30) 只敵を討(つ)事を忘(れ)ざる也。(「風來六部集」下『日本古典文學大系』55巻 p. 274)
- (31) 父にも語りふいちょうせしを忘れしか。(「國性爺合戦」『日本古典文學大系』50巻 p. 290)
- (32) あんまりごたへしてはなすのを忘れたが、(「春色梅兒譽美」『日本古典文學大系』64巻 p. 204)



次に、中世語、近世語の「忘れる 2」について、文補語が「ア．普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表している場合と「イ．述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ」を表している場合と「ウ．述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラ」を表している場合の各々において、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語（ノ止め文補語は近世語のみ）がどの程度の割合で出現しているのかについて見ていく。

次の表16、表17は、中世語、近世語の「忘れる 2」がア、イ、ウのタイプの文補語を取る場合の、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語の出現数ならびに出現率を示している。

表16 中世語の「忘れる 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

中世語の「忘れる」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合 計
ア．普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	2(67%)	1(33%)	3(100%)
イ．「忘れる 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	8(89%)	1(11%)	9(100%)
ウ．「忘れる 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	2(25%)	6(75%)	8(100%)
合 計	12(60%)	8(40%)	20(100%)

表17 近世語の「忘れる 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近世語の「忘れる」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア．普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	0	0	0	0
イ．「忘れる 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	8(53%)	0( 0%)	7(47%)	15(100%)
ウ．「忘れる 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	1( 9%)	8(73%)	2(18%)	11(100%)
合 計	9(35%)	8(31%)	9(35%)	26(100%)

まず、文補語が「ア．普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すものについては、中世語においては、コト止め 2 例、連体止め 1 例が存在した。次の (33) と先に挙げた (28) は、各々中世語におけるこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (33) 酒宴ヲ愛スル人, 依<sub>レ</sub>之財寶ノ費, 身命ノホロビ, 病ノ起リ, 咎ノ來事ヲ忘ル。(『沙石集』巻第4(1)『日本古典文學大系』85巻 p. 169)

一方, 近世語においては, コト止め, 連体止め, ノ止めのいずれの例も存在していなかった。従って, このタイプにおいては, コト止め文補語の出現率の差が有意であるか否かについての検定は不可能であった。

次に, 文補語が「イ.『忘れる』が表す動作時現在において未然のコトガラ」を表すものについては, 中世語においては, コト止め8例, 連体止め1例, 計9例が存在した。先に挙げた(27)と次の(34)は, 各々中世語におけるこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (34) あまりの面白さに宿へ戻るも忘るるほどのことござる。(『箕被』『日本古典文學大系』43巻 p. 32)

一方, 近世語においては, コト止め8例, ノ止め7例の計15例が存在した。先に挙げた(30)と(32)は, 各々近世語におけるこのタイプのコト止めの例とノ止めの例に相当する。

このタイプについては, 近世語のコト止めの出現率が中世語よりも36ポイント低かったので, この差が有意な差であるか否かについて, 次の表18の2×2分割表を用い, イェーツの修正式を用いた $\chi^2$ 検定を行ってみたところ,  $P > .05$ で有意性は棄却された。

表18 中世語, 近世語の「忘れる2」が取るイのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	8 ( 89%)	8 ( 53%)	16
コト止め以外の文補語	1 ( 11%)	7 ( 47%)	8
合 計	9(100%)	15(100%)	24

$$\chi^2_0 = \frac{24 \left( \left| 8 \times 7 - 8 \times 1 \right| - 24 \div 2 \right)^2}{9 \times 15 \times 16 \times 8} = 1.8 < \chi^2_{0.05}(3, 84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

最後に、文補語が「ウ、『忘れる』が表す動作時現在において已然のコトガラ」を表すものについては、中世語においては、コト止め2例、連体止め6例の計8例が存在した。次の(35)と(36)は、各々中世語におけるこのタイプのコト止めの例と連体止めの例に相当する。

- (35) 死を恐れざるにはあらず、死の近(き)事を忘るゝなり。(「徒然草」第93段『日本古典文学大系』30巻 p. 166)
- (36) まさな事せさせ給(ひ)しを忘れ給はで、(「徒然草」第176段『日本古典文学大系』30巻 p. 235)

一方、近世語においては、コト止め1例、連体止め8例、ノ止め2例の計11例が存在した。次の(37)と先に挙げた(31)と以下の(38)は、各々近世語におけるこのタイプのコト止めの例と連体止めの例とノ止めの例に相当する。

- (37) 切た事を打忘れ。(「菅原傳授手習鑑」『日本古典文学大系』99巻 p. 83)
- (38) ヲ、長ばなして骸が乾くのも忘れた。(「浮世風呂」2編巻之下『日本古典文学大系』63巻 p. 156)

このタイプについては、近世語のコト止めの出現率が中世語より16ポイント低かったので、この差が有意な差であるか否かについて、次の表19の2×2分割表を用い、イエーツの修正式を用いた $\chi^2$ 検定を行ってみたところ、 $P > .05$ で有意性は棄却された。

表19 中世語、近世語の「忘れる2」が取るウのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	2( 25%)	1( 9%)	3
コト止め以外の文補語	6( 75%)	10( 91%)	16
合 計	8(100%)	11(100%)	19

$$\chi^2_0 = \frac{19(|2 \times 10 - 1 \times 6| - 19 \div 2)^2}{8 \times 11 \times 3 \times 16} = 0.09 < \chi^2_{0.05}(3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

以上、4.3では、中世語、近世語における「忘れる」が取る文補語標識についての調査結果を見てきた。次の4.4では「やめる」が取る文補語についての調査結果を見ていく。

#### 4.4. 「やめる」を語基とする動詞述語文の場合

ここでは、文補語を取る動詞が「やめる」を語基とするものの場合について見ていく。

「やめる」については、以下の表20、表21が示すように、中世語、近世語ともに文補語の表すコトガラを中止する行為を表していた。

表20 中世語の「やめる」が取るコト止め、連体止め文補語数

中世語の「やめる」が表す意味の種類	コト止め	連体止め	合 計
文補語の表すコトガラを中止する行為	3	0	3

表21 近世語の「やめる」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

近世語の「やめる」が表す意味の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
文補語が表すコトガラを中止する行為	1	1	2	4

次の(39)は、中世語のコト止めの例に、(40)と(41)と(42)は、各々近世語のコト止めの例と連体止めの例とノ止めの例に相当する。

(39) 殿にいるゝ事をやめられけるには、(『平家物語・葵前』巻第6『日本古典文学大系』32巻 p. 393)

(40) ソレヨリ果二運上取ルコトヲ止、<sup>15)</sup>(『都鄙問答』巻之2『日本古典文学大系』97巻 p. 428)

15) (40)の「止」については、テキストに「ヤメ」というルビが振られていたので、「ヲ」「ヤメ」の共出検索でヒットした。

- (41) 「一座花車づくをやめて向ふ齒のつゞくほど喰へ」と、(『好色一代男』巻6『日本古典文學大系』47巻 p. 171)
- (42) のふ皆の衆。もふ突の切のをやめにして。(『鎌倉三代記』第8『日本古典文學大系』52巻 p. 266)

中古語においては、「やむ」「はつ」のような、渡邊 (2004a) の言う、非存在化述語は、「ある」や「ない」のような存在述語と同様、存在性についての言及の対象となるコトガラを表す文補語としてコト止め文補語を取る傾向にあった<sup>16)</sup>。しかし、非存在化述語に相当する近世語の「やめる」においては、表21のように連体止め文補語やノ止め文補語を取る例が登場している。また、現代語においても、「やめる」は、コト止め文補語、ノ止め文補語のいずれも取りうる<sup>17)</sup>。

従って、このことから、「やめる」が取る文補語は、中世語から近世語にかけて、存在性についての言及対象としての性格が薄れ、代わって停止動作の対象としての性格が強くなっていったものと考えられる。

次に、中世語、近世語の「やめる」について、文補語が「ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表している場合と「イ. 述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ」を表している場合と「ウ. 述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラ」を表している場合の各々において、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語（ノ止め文補語は近世語のみ）がどの程度の割合で出現しているのかについて見ていく。

次の表22、表23は、中世語、近世語の「やめる」がア、イ、ウのタイプの文補語を取る場合の、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語の出

表22 中世語の「やめる」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

中世語の「やめる」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合 計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	0	0	0
イ. 「やめる」が表す動作時現在において未然のコトガラ	3(100%)	0(0%)	3(100%)
ウ. 「やめる」が表す動作時現在において已然のコトガラ	0	0	0
合 計	3(100%)	0(0%)	3(100%)

16) 渡邊 (2004a) を参照のこと。

17) 橋本 (1990) を参照のこと。

現数ならびに出現率を示している。

表23 近世語の「やめる」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近世語の「やめる」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	0	0	0	0
イ. 「やめる」が表す動作時現在において未然のコトガラ	1(25%)	1(25%)	2(50%)	4(100%)
ウ. 「やめる」が表す動作時現在において已然のコトガラ	0	0	0	0
合 計	1(25%)	1(25%)	2(50%)	4(100%)

まず、文補語が「ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すものについては、中世語、近世語ともに用例が存在しなかったので、中世語と近世語とでコト止め文補語の出現率に有意な差があるか否かを検定することはできなかった。

次に、文補語が「イ. 『やめる』が表す動作時現在において未然のコトガラ」を表すものについては、中世語においては、コト止め3例のみが存在した。先に挙げた(39)は、中世語のこのタイプのコト止めの例に相当する。

一方、近世語においては、コト止め1例、連体止め1例、ノ止め2例の計4例が存在した。先に挙げた(40)と(41)と(42)は、各々近世語のこのタイプのコト止めの例と連体止めの例とノ止めの例に相当する。

このタイプについては、近世語のコト止めの出現数が、中世語より75ポイント低かったのでこの差が有意な差か否かについて以下に示すような直接確率法による検定を行ったところ、 $P > .05$ で $H_0$ は棄却されず、有意な差は認められなかった。

表24 中世語、近世語の「やめる」が取るイのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時 代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	3(100%)	1( 25%)	4
コト止め以外の文補語	0( 0%)	3( 75%)	3
合 計	3(100%)	4(100%)	7

H<sub>0</sub>: 中世語と近世語のコト止めの出現率には有意な差はない

表25 H<sub>0</sub>を棄却すべきパターン

P <sub>0</sub>	
3	0
1	3

$$P_0 = \frac{4!3!3!4!}{7!3!0!1!3!} = 0.11$$

$$\therefore P > .05$$

最後に、文補語が「ウ、『やめる』」が表す動作時現在において已然のコトガラを表すものについては、中世語、近世語とも存在せず、従って、このタイプについては、中世語と近世語のコト止めの出現数に有意な差があるか否かを検定することはできなかった。

以上、4.4では、中世語、近世語における「やめる」が取る文補語についての調査結果を見てきた。次の4.5では「聞く2」「知る2」「忘れる2」「やめる」が取る文補語を合計したものについて、ア、イ、ウの各々のタイプのコト止め文補語の出現率を見ていく。

#### 4.5. 「聞く2」「知る2」「忘れる2」「やめる」が取るコト止め文補語の種類と出現率

##### 4.5.1. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ

ここでは、「聞く2」「知る2」「忘れる2」「やめる」（以下「聞く2ーやめる」と記す）が取る文補語のうち、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラを表すものが、コト止めとして現れる割合について見ていく。

次の表26は、この割合を示したものである。

表26 中世語、近世語の「聞く2ーやめる」が取るアのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時 代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	21 ( 72%)	44 ( 98%)	65
コト止め以外の文補語	8 ( 28%)	1 ( 2%)	9
合 計	29 (100%)	45 (100%)	74

このタイプについては、近世語のコト止め文補語の出現率が中世語より26ポイント高かったので、この差が有意な差であるか否かについて、表28の2×2分割表を用い、イエーツの修正式を用いた $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $P < .005$ で、有意性が認められた。

$$\chi^2 = \frac{74 \left( \left| \frac{21 \times 1 - 44 \times 8}{29 \times 45 \times 65 \times 9} \right| - 74 \div 2 \right)^2}{29 \times 45 \times 65 \times 9} = 13.12 > \chi^2_{0.005}(7.88)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .005$$

従って、このタイプの「聞く2ーやめる」については、このタイプの「知る2」と同様、中世語から近世語にかけて、コト止めの出現率が上昇していると言うことができ、このことから、4.2でも示唆したように、中世語から近世語にかけて「こと」の働きに、「不特定で抽象的なコトガラを示す」働きが生じたと見ることができる。

以上、「聞く2ーやめる」が取るアのタイプの文補語について見てきた。

次の4.5.2では、「聞く2ーやめる」が取る文補語のうち、述語動詞が表す動作時現在において未然のコトガラを表すものが、コト止め文補語として出現する割合について見ていく。

#### 4.5.2. 述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ

次の表27は、「聞く2ーやめる」が取る文補語のうち、述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラを表すものが、コト止め文補語として現れる割合を示したものである。

表27 中世語、近世語の「聞く2ーやめる」が取るイのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時 代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	17( 94%)	14( 47%)	31
コト止め以外の文補語	1( 6%)	16( 53%)	17
合 計	18(100%)	30(100%)	48

このタイプについては、近世語のコト止め文補語の出現率が中世語よりも47ポイント低かったので、この差が有意であるか否かについて表27の2×2



分割表を用い、イエーツの修正式を用いた  $\chi^2$  検定を行ったところ、 $P < .005$  で、有意性が認められた。

$$\chi^2_0 = \frac{48(|17 \times 16 - 14 \times 1| - 48 \div 2)^2}{18 \times 30 \times 31 \times 17} = 9.23 > \chi^2_{0.005}(7.88)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .005$$

従って、このタイプの「聞く 2-やめる」については、このタイプの「知る 2」と同様、中世語から近世語にかけて、コト止めの出現率が低下していると言うことができ、このことから、中古語に存在していた「文補語の表すコトガラの未然性を示す」働きが中世語から近世語にかけて弱まっていったと見ることができる。

以上、「聞く 2-やめる」が取る文補語のうち、述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラを表すものが、コト止め文補語として現れる割合について見てきた。

次の4.5.3では、「聞く 2-やめる」が取る文補語のうち、述語動詞が表す動作時現在において已然のコトガラを表すものが、コト止め文補語として現れる割合について見ていく。

#### 4.5.3. 述語動詞が表す動作時現在において已然のコトガラ

次の表28は、中世語の「聞く 2-やめる」が取る文補語のうち、述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラを表すものが、コト止め文補語として現れる割合を示したものである。

表28 中世語、近世語の「聞く 2-やめる」が取るウのタイプの  
コト止め文補語の出現数ならびに出現率

文補語の種類 \ 時 代	中 世	近 世	合 計
コト止めの文補語	16 ( 21%)	30 ( 37%)	46
コト止め以外の文補語	61 ( 79%)	51 ( 63%)	112
合 計	77 (100%)	81 (100%)	158

このタイプについては、近世語のコト止め文補語の出現率が中世語よりも

16ポイント高かったのでこの差が有意であるか否かについて表28の  $2 \times 2$  分割表を用い、 $\chi^2$  検定を行ったところ、 $p < .025$  で有意性が認められた<sup>18)</sup>。

$$\chi^2_0 = \frac{158(16 \times 51 - 30 \times 61)^2}{77 \times 81 \times 46 \times 112} = 5.05 > \chi^2_{0.025}(5.02)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .025$$

従って、このタイプの「聞く2-やめる」についても、「知る2」と同様、コト止めの出現率は、中世語から近世語にかけて上昇していると見ることができる。

なお、中古語の「こと」には、「文補語が表すコトガラの重大性を強調する」働きが存在していたが、中世語においては、重大性が高いと思われるにもかかわらず、連体止めになっている次の(43)のような例が存在し、近世語においては、重大性が特別高くはないと思われるにもかかわらず、コト止めになっている(44)のような例が見られる。

(43) 大將ノ自ラ戦ヒ打死シ給ヲモ知ラザリケルコソ悲ケレ。(『太平記』  
『日本古典文学大系』35巻 p. 320)

(44) そちがどうして魚のしびれのきれた事を知るものじや」といふに、  
(「ひとりね」『日本古典文学大系』96巻 p. 67)

従って、これらのことより、中世語から近世語にかけ、中古語の「こと」に存在していた「文補語が表すコトガラの重大性を強調する」働きはしだい

18) このタイプの文補語を取る近世語の「忘れる2」については、コト止め以外のものの中に、次の(i)-(iii)のように聞き手に詰問するモダリティを伴い、「を」が対象を表す格助詞としてだけではなく逆接を表す接続助詞としても解釈できるものが、6例存在した。

(i) 先へ参つて其譯云へと云付たを忘れたか。(『菅原傳授手習鑑』『日本古典文学大系』99巻 p. 109)

(ii) 櫛も取なと云付やったを何故忘れた。(『假名手本忠臣蔵』第10『日本古典文学大系』51巻 p. 373)

(iii) 世帯持てと言ふたのを、忘れてかいな(『お染久松色讀販』『日本古典文学大系』54巻 p. 268)

従って、これらを除外するとさらに有意水準が高くなる。

に弱まり、代わって4.2で述べたように「こと」が新たな働きを獲得していったと考えられる。

また、この新たな働きとは、渡辺（1997）が現代語における文補語標識「こと」の意味について行った以下の規定における「イメージ」「知識」といった「概念としてのコトガラ」を示す働きではないかと考えられる。

「こと」は、ある世界の有り様について認知者が所有する「イメージ」  
或いは、「イメージ」として意識されることもあるが通常は意識されてい  
ない状態で脳の中に保存されている「知識」を指示する。（渡辺1997：p.  
259）

さらに、この働きは、中古語からすでに存在していた、発話伝達行為の対象となる伝達内容を示す働きや、2.5.2で挙げた、中古語から近世語にかけて生じたと思われる「非特定の抽象的なコトガラを示す」働きの上位概念として派生された可能性がある。

#### 4.5.4. 調査結果の分析のまとめ

4.5.1-4.5.3では、「聞く2-やめる」が取るコト止め文補語の出現率の変化について見てきた。

その結果、文補語が普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラを表すものについては、コト止め文補語の出現率の上昇が認められた。また、文補語が述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラを表すものについては、コト止め文補語の出現率の低下が認められ、文補語が述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラを表すものについては、反対にコト止め文補語の出現率の上昇が認められた。

これまでの考察から「こと」の働きの変容を図式化すると次頁のようになる。

図1に示したように発話伝達行為の対象となるコトガラを示す行為と存在性に関する言及対象となるコトガラを示す働きは、現代語まで引き継がれていく。ただし、「やめる」が取る文補語については、存在性に対する言及対象としての性格は薄れ、停止動作の対象としての性格が強くなっていく。

また、中世語から近世語にかけてコトガラの重大性を強調する働きは衰退していき、コトガラの未然性を示す働きも近世語に入ってから衰退していく。

中古語	中世語	近世語
発話伝達行為の対象となるコトガラを示す働き（継続）		概念としてのコトガラ を示す働き （獲得）
コトガラの重大性を強調する働き（衰退）	非特定の抽象的なコトガラを示す働き（獲得）	
コトガラの未然性を示す働き（衰退）		
存在性に関する言及対象となるコトガラを示す働き（継続）		

図1 文補語標識「こと」の働きの変容

そして、これらの変化に並行し、非特定の抽象的なコトガラを示す働きが派生され、さらに、この働きや発話伝達行為の対象となるコトガラを示す働きを包括する、概念としてのコトガラを示す働きが派生される。

以上、中世語から近世語にかけての文補語標識としての「こと」の働きの変容について見てきた。その結果、文補語標識「こと」の使用状況が、近世語においてかなり現代語に近づいていることが明らかとなった。

## 5. お わ り に

本稿においては、中世語、近世語の「聞く」「知る」「忘れる」「やめる」が取る文補語標識「こと」の使用について、考察を行ってきた。その結果、先の4.5.4に示したことが明らかとなった。

なお、本稿では、文補語標識「こと」に主眼を置いて考察を行ってきたが、近世に入ってから文補語標識「の」が連体止め文補語の領域に用いられるようになる。この文補語標識としての「の」が如何にして誕生したのかという問題については、稿を改めて論じたい。

## 参 考 文 献

- 工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』50（3）至文堂
- 久野 暉（1973）「第17章『コト』、『ノ』と『ト』」『日本文法研究』大修館書店
- 黒田成幸（1976）「日本語の論理・思考」『岩波講座日本語1 日本語と国語学』岩波書店

- 橋本 修 (1990) 「補文標識『の』『こと』の分布に関わる意味規則」『国語学』163
- 吉川泰雄 (1950) 「形式名詞『の』の成立」『日本文学教室』3 蒼明社
- 渡辺ゆかり (1997) 「『記憶』動詞と『の』、『こと』」『名古屋大学言語文化論集』19 (1)
- 渡辺ゆかり (1999) 「ヲ格補文の『叙実性』と『の』」『広島女学院大学日本文学』9
- 渡辺ゆかり (2004a) 「中古の日記、随筆における文補語標識『こと』の使用について」  
『平井勝利教授退官記念 中国学・日本語学論文集』白帝社
- 渡辺ゆかり (2004b) 「中古語における文補語標識『こと』の使用について」『広島女学院大学論集』15
- Akatsuka, Noriko M. (1978) “Another Look at *No*, *Koto*, and *To*: Epistemology and Complementizer Choice in Japanese.” *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Tokyo: Kaitakusha.
- Josephs, Lewis S. (1976) “Complementation” *Syntax and Semantics* 5, New York: Academic Press.